博物館における震災体験の記憶と伝達

――「北淡町震災記念公園（野島断層保存館）」をめぐって――

How to prevent records of disaster experiences
from weathering in terms of musuem display?:
The case of Nojima Fault Preservation Museum

矢　守　克　也

Katsuya YAMORI

社会学部人間関係学科

要　約

本研究は、阪神・淡路大震災（1995年１月17日）にともなう体験の記憶とその伝達をめぐって筆者が展開してきた一連研究の一部である。本研究では、震災に関連して建設された博物館が果たす心理・社会的機能について論じる。具体的には、震災後３年を経て、同震災を引き起こした震源断層である野島断層（兵庫県淡路島）の保存を主たる目的として建設された「北淡町震災記念公園（野島断層保存館）」をとりあげた。まず、同施設の建設経緯、施設展示・運営内容に関する事実経過、客観的事実・現状について集約した（Ⅱ節）。次に、筆者自身のフィールドワーク（現場観察、スタッフや見学者に対するインタビューなど）に基づいて、同施設の運営に携わる人々（館内スタッフや語り部の人々）、および、そこを訪れる人々が示す態度、行動上の特徴について列記した。あわせて、Ⅱ節で報告した個々の展示内容が果たしていると思われる機能についても言及した（Ⅲ節）。最後に、Ⅳ節では、以上の２節を踏まえて、同施設が阪神・淡路大震災の記憶とその伝達に果たす役割、および、問題点、ひいては、博物館一般が現実的な出来事の記憶とその伝達に果たす役割、および、問題点について考察を加えた。

Ⅰ．はじめに

本研究は、阪神・淡路大震災（1995年１月17日）にともなう体験の記憶とその伝達をめぐって筆者が展開してきた一連研究の一部である。震災体験の記憶と伝達に関して、筆者は、これまで、さまざまな具体的事例、実践的試みに関するフィールドワーク、および、それらフィールドワークの基盤をなす理論的枠組みに関する検討を進めてきた。

前者については、第１に、直接の体験者による体験伝達の試みを扱った

研究として、被災者によって形成された語り部グループ（「語り部グループ117」）の活動に関する参与観察研究を行った（Yamori, 2001a; Yamori, 2001b; 矢守, 2000a; 矢守, 2001a; 矢守, 2001b)。第2に、フィクションによる体験継承の試みの一例として、団員の多くが被災した「劇団青い森」（神戸市東灘区）による震災劇をとりあげた（矢守, 印刷中a)。第3に、震災後、被災地の各所に建てられた数々のモニュメントが果たす役割について論じた（矢守, 2001c)。第4に、震災を契機とした知識・用語の普及という観点から震災体験の記憶について論じた研究では、「活断層」という概念の大衆的普及について検討した（矢守, 印刷中b)。さらに、他の事故・災害事例と比較対照しながら、経験的なデータを用いて体験の風化現象を測定・表現する試みも展開した（矢守, 1995; 投稿中)。

後者については、主として、社会的表象理論（Moscovici, 1984など)、および、社会構成主義（Gergen, 1985など）に基づいて、突発的な事故・災害、あるいは、戦争体験を記憶・継承することの意味・権利、および、その原理的メカニズムについて論究した。具体的には、第1に、社会的表象理論と社会構成主義の関連性について、本分野について精力的に研究を展開しているWagnerの見解をベースに基本的な方向性を展望しておいた（矢守, 2001d)。第2に、事故・災害等に伴う死を人々が身近に体験することの意味について原理的な検討を行なった（矢守, 2000b)。さらに、上掲のフィールドワーク研究が共通して、その理論的基盤として依拠している主要概念群（「記憶」、「記録」、「身構え」、「純粋な風景」など）について、その概念内包を位置づけた（矢守, 2001e)。

以上に略述した先行研究を踏まえ、本研究では、阪神・淡路大震災に関連して建設された博物館が果たす心理・社会的機能について論じることにしたい。事故・災害、戦争など、広範な範囲に、かつ、永続的に大きな社会的影響を与える出来事については、その後、その出来事、あるいは、それに伴う体験を記憶・保存・伝達することを主要目的とした施設が建設さ

れることが多い。博物館は、そうした施設の代表例であり、実際、「平和記念資料館」(広島市)、「土石流災害遺構保存公園」(雲仙普賢岳)、「戦艦アリゾナ記念館」(ハワイ) など、類例は多数存在する。阪神・淡路大震災も例外ではない。震災後3年を経て、同震災を引き起こした震源断層である野島断層 (兵庫県淡路島北淡町) の保存を主たる目的として、「北淡町震災記念公園 (野島断層保存館)」が開設された[1)]。

そこで、本論では、この施設を事例としてとりあげ、その具体的内実について報告するとともに、博物館という存在が震災体験の記憶と伝達に果たす役割について心理・社会学的に検討する。具体的には、まず、同施設の建設経緯、施設展示・運営内容に関する事実経過、客観的事実・現状について述べる (Ⅱ節)。後出のごとく、そこでの記述は子細にわたり過ぎるきらいもあろうが、博物館について検討する以上、具体的な展示内容を含め、施設の物理的特徴・性状にわたる報告が必要と考えた。次に、筆者自身のフィールドワーク (現場観察、スタッフや見学者に対するインタビューなど) に基づいて、同施設の運営に携わる人々 (館内スタッフや語り部の人々)、および、そこを訪れる人々が示す態度、行動上の特徴について列記する。あわせて、Ⅱ節で報告した個々の展示内容が果たしていると思われる機能についても言及する (Ⅲ節)。最後に、Ⅳ節では、以上の2節を踏まえて、同施設が阪神・淡路大震災の記憶とその伝達に果たす役割、および、問題点、ひいては、博物館一般が現実的な出来事の記憶とその伝達に果たす役割、および、問題点について考察を加える。

Ⅱ. 施設の概要

(1) 施設公開後の経緯

兵庫県淡路島。阪神・淡路大震災の震源地となった北淡町に、「北淡町震災記念公園」はある。同公園は、兵庫県が中心となって総事業費約70億

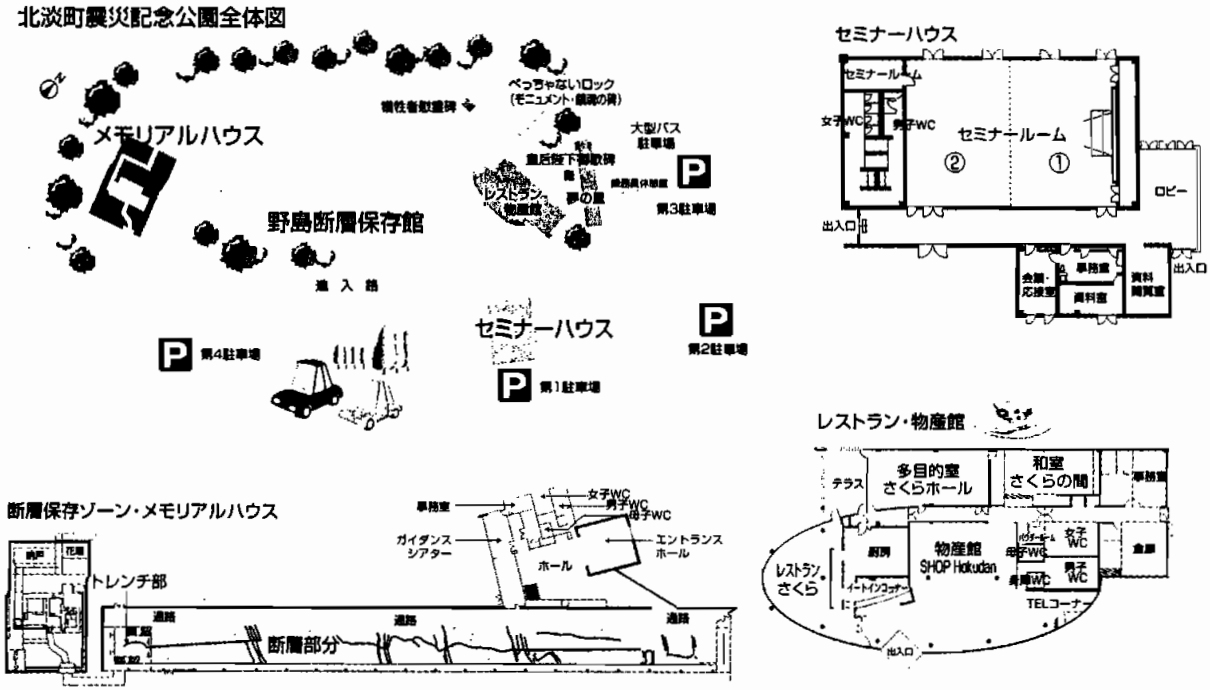

図1　「北淡町震災記念公園」の全体図

図２　「野島断層」の空撮写真
（上方が「メモリアルハウス」として保存された家屋）

円をかけ、地震から3年余りを経た1998年4月2日にオープンした（図1）。運営には、第三セクターの「㈱ほくだん」があたっている。その中核施設は「野島断層保存館」であり、地震によって地表に露出した断層面（約140m）を現地保存・公開展示している。なお、この断層面は、震源断層として地震直後から新聞紙上で写真入りで大きく報道されたものであり（図2）、1998年7月には、国の天然記念物にも指定されている。

本州と島とを結ぶ明石海峡大橋の開通も奏功して、入場者数は予想を大きく上まわった。開館後わずか1年間（1999年4月末まで）で300万人を突破した（当初の年間目標は、30万人であった）。つまり、1日平均7500人もの人がここを訪れたことになり、このこと自体、きわめて注目すべきことであろう。しかし、2年目以降は入場者が減少に転じる。2年目の1年間の入場者数は約100万人で1年目の3分の1に減少し、3年目以降（2000年4月以降）は、「淡路花博」の開催によって観光客が花博に集中し、同公園をはじめ島内の他の観光施設は入場者をさらに減少させた。

そんな中、同公園は、中核施設たる断層保存館に加え、地元の犠牲者の慰霊碑を中心とした公園を整備するとともに、併設のレストランや物産館の拡充をはかった。さらに、1999年4月からは、断層直上にあって大きな被害を受けた個人住宅（図1、2を参照）を兵庫県が買い取り、家族の証言をもとに室内を震災直後の状態に再現したうえで、「メモリアルハウス」としてオープンさせた。このメモリアルハウスで、主として地元の被災者有志によって始められたのが、「震災の語りべ」というとりくみであった。これは、毎週1回、地元北淡町の被災者有志、および、趣旨に賛同して神戸方面から参加している被災者が来館者を前に、被災した自宅の写真、自ら描いた絵などを手に思い思いに震災の体験談を語るものである[2)]。

一方、震災5年後の2000年1月17日には、「北淡町5周年追悼式典」がとりおこなわれるとともに、同日から10日間にわたって、「北淡町国際活断層シンポジウム」が新設の「セミナーハウス」を中心に開催された。同

シンポジウムには、地震学、地質学など、地震研究に従事する自然科学研究者が国内外から多数参加した。なお、「震災の語りべ」には、修学旅行、校外学習で同施設を訪れる小中学生の参加も増え、そうした場合には、メモリアルハウスに加えセミナーハウスも活動場所として利用されている。

(2) 各施設の概要

ここでは、前項で概述した各施設について、より詳細に述べておこう。「北淡町震災記念公園」は、2つの主要施設――「野島断層保存館」、「メモリアルハウス」――、および、「セミナーハウス」、「物産館」（レストランと

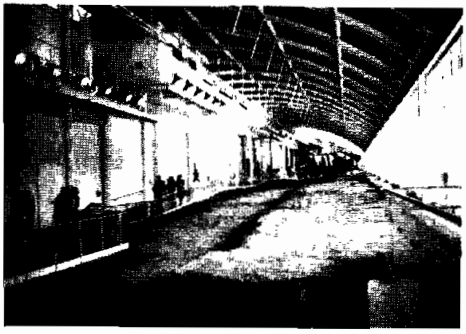

図3　断層保存ゾーン

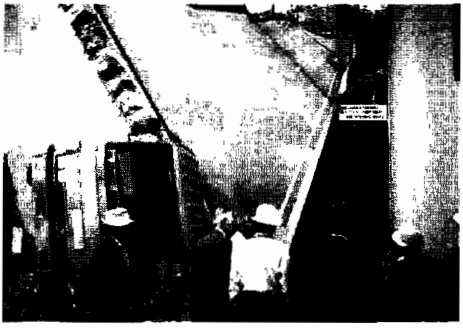

図4　震災モニュメント（阪神高速高架橋の倒壊現場を再現）

図５　野島断層の動く地形模型

図６　活断層に関するパネル展示（「断層保存館」内）

土産物店)、「慰霊碑を中心とした公園」から成り立っている。以下、これらについて順に記す。

「野島断層保存館」の概要は、図１に示されている。同館の中心は、地表に剥き出しになった断層面（約140メートル）の現地保存展示である（図３)。このうちの一部は、「トレンチ展示」として地中まで掘り下げられた様子を見学できるようになっている。また、エントランスホールには、メディアでも再三報道された阪神高速高架橋の倒壊現場を再現した「震災モニュメント」があって、入場者の多くが足を止める光景が見られる（図４)。さらに、震災の記録映像を随時上映する「ガイダンスシアター」、活断層の動きを再現する「断層面の動く模型」(図５)、地震のメカニズム、活断

層の分類等に関する説明パネル多数（図６）が、見学コースに沿って配置されている。

「メモリアルハウス」は、断層保存館に隣接した施設で、来訪者は保存館見学の後にここを訪れることになる。メモリアルハウスは、断層直上にあって大きな被害を受けた個人住宅である。台所と和室が公開されており、地震発生時分（午前５時46分）で停止した時計の掛かる台所は、食器等が散乱した揺れ直後の様子を再現している（図７）。また、和室の天井面や柱には、水平方向、垂直方向とのズレを示す表示があって、その家屋が大きな揺れによって傾き、歪んでいることを実感できるしくみとなっている。また、「震災の語りべ」の活動も、この和室を中心に行われている（図８、

図７　地震直後の様子を再現した台所（「メモリアルハウス」内）

図８　「震災の語りべ」の活動の一こま（神戸から参加の女性）

図９　「震災の語りべ」の活動の一こま（地元の男性）

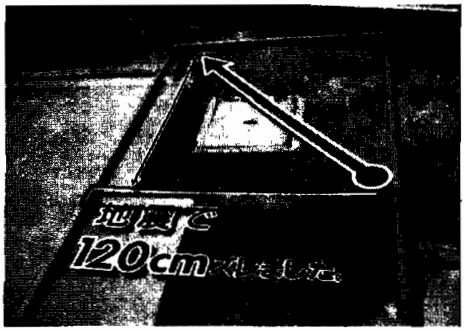

図10　地震による地面のズレを示す表示（「メモリアルハウス」周辺）

図９）。また、玄関ホール付近には、米国における活断層対策などについて記したパネル展示が設置され、さらに、家屋周辺（裏庭など）にも、花壇や家屋の基礎部分のズレを示す表示が配されている（図10）。

以上２つの主要施設を補完すべく、「セミナーハウス」がその後建設された。セミナーハウスでは、先述の通り、地震災害に関するシンポジウムや会合が行われ、また、語り部活動の場となることもある。また、「物産館」にはレストランと土産物店が入っている。地元の名産品はもちろん、各種の防災グッズ（家具転倒防止装置など）を購入することもできる。さらに、活断層そのものを素材にした土産物（例えば、「野島活断層マーブルケーキ」）も販売されている。一方、「物産館」の後方、瀬戸内海を望む位置に、

地元で亡くなった被災者の名を刻んだ「慰霊碑」が立ち、その周辺は公園として整備されている。公園では、施設見学を終えた修学旅行生らが弁当を開く光景がしばしば見られる。

(3) 建設・施設公開までの経緯

ここで、事実経過の順序とは逆になるが、同公園、とりわけ、野島断層保存館が建設され公開されるまでの経緯を簡単にまとめておきたい。この点については、今井（2000）が簡にして要を得た集約を行っているので、以下、主として、今井（2000）に依拠して述べる。

まず、矢守（印刷中 b）でも強調したように、野島断層の空撮映像、とりわけ、断層保存館が建設された現地周辺の映像が、震源断層として震災直後から繰り返し報道されたことが重要である。この結果、野島断層は、地震学、地質学などの専門家のみならず、一般の人々にも広く知られるところとなった。特に、専門家の関心は高かった。

> 地震発生翌日には、すでに多くの活断層研究者が現地に入り、直ちに北淡町あてに野島断層保存の要望書が出された。これを受け町は、四日後の一月二十一日にはすでに断層の崩壊を防ぐビニールシートをかけるなどの保護措置を講じた。（桂，1999，p.42）

さらに、今井（2000，p.5）によれば（年号表記は引用者により変更）、

> その後、地震直後に調査に入った研究者によって町に「断層保存」の要望が出され、北淡町長が断層の永久保存を検討することとなった（毎日新聞1995年１月25日付）。
>
> また、日本地質学会で野島断層保存の議決が行われ（同年４月１日）、日本地質学会会長から北淡町に対して「野島断層保存の要望書」が提

出され（同年４月10日）、北淡町から県教育長に対して「防災記念公園整備」を要望した（同年７月７日）。そして、1996年５月31日県企業庁と北淡町が「野島震災復興記念公園（仮称）」の整備に関する基本協定書を締結した（県からの資料による）。

そして、北淡町一帯のなかから、後に詳細に検討する「野島断層保存検討委員会」が６カ所の断層保存候補地を選定し（野島断層保存検討委員会，1997，1-10）、そのうち小倉地区の断層を候補地として選定した。小倉地区における断層が隆起した地域は、土砂採取跡地であり、未換地の地域であった。そのため、まず地権を確定したのが1998年１月、そのうえで地権者の同意を得たのが1998年３月であった。そして、「平成10年［1998年］３月４日に小倉地区延長約185メートルの天然記念物指定申請を行うこととなった」（川吉，1999，47）。その後、1998年７月31日に「野島断層」が国の天然記念物に指定されたのである。

もっとも、この間、地元の被災者を中心に、保存に反対する意見も提出されていたことも看過できない。例えば、朝日新聞（1995年２月２日付）は、「災害を永久保存するようなことは絶対にいやだ。断層のずれを見るたびにつらい思いがよみがえる。町はほかにすべきことがあるのでは…」という住民の声を伝えている。さらに、今井（2000）は、断層保存地区周辺の区画整理に伴う地元住民間の葛藤・対立が、断層保存問題に影響を及ぼした可能性を示唆している。いずれにせよ、断層保存館がすべての人々の賛意を得て建設されたわけではなく、活断層という「負の遺産」（荻野，2000）を保存することに対する反発、抵抗も見られたことは銘記しておかねばならないだろう。しかし、研究者や見学者が多数押し寄せ断層（地表面）を破壊する現状を憂え、貴重な断層の保存を重視する研究者、兵庫県、地元自治体は、先に述べたように「野島断層保存検討委員会」を発足させ、

断層保存館を含む震災関連施設の建設へと動き、1999年4月の公開を迎えたのである。

以上の経緯は、一言で述べれば、「野島断層の場合には、「地元の意向」ではなく、「研究者の意向」がまずはじめにあったということになろう」(今井，2000，p.7)。すなわち、

> 震災の翌日、断層を見た小久保正雄町長は「地球が裂けた。凄絶（せいぜつ）な光景だ」と衝撃を受けると同時に「これを町おこしに使えんやろうか」と思いたった。学者や防災関係者から保存を求める声が相次いだことに意を強くして、建設を推進した。町では三十九人が亡くなり、九割を超す家が損壊した。「思い出したくもない」という反発もあったが、「原爆ドームがなければ被爆の記憶はもっと風化していたはず」とヒロシマを引き合いに出して説得した。(朝日新聞，1998年6月4日)

以上の報道内容が、開館までの事実経過を簡潔に集約しているであろう。しかし、他方で、同公園の関連施設には、高齢者を中心に当初予定の3倍にあたる100人以上の地元住民が雇用され（1998年)、さらに、地元住民が、「震災の語りべ」、あるいは、館内スタッフとして記念公園の運営に積極的に関与していることも、また事実である。

Ⅲ．フィールドワーク

本施設には、活断層と廃墟とが見事に保存・再現され、「ショーアップ」されている。これは、軽率な言いまわしかも知れないが、そこで行われていること（の一部）を表現するにふさわしい言葉であることも否めない。この場所を、1日平均7500人もの人が訪れた。現場での観察、インタビュー

によれば、来館者の多くは関西近郊に在住する人々であり、何らの形で震災を体験した――自宅で揺れを感じた、親戚宅が大きな被害を受けた、神戸市内でボランティアとして活動した――人々が多い。また、修学旅行、遠足など、校外学習の一環として当地を訪問する小中学生も多い。

本研究では、施設そのものをひとつの場としてとらえる立場から、展示内容に注目し語り部の集いに参加するのみならず、そこを訪れ去っていく来館者の典型的な行動を、現地での行動観察（録音、写真撮影）、インタビューなどにより記録し、フィールド・ノートを作成した。フィールドワークは、1999年4月～2001年8月にかけて計4回実施した。本節では、その中から注目すべき点を列挙し若干のコメントを挿んでおきたい。

(1) 3つの注目箇所：

多くの来館者を引きつけるのは、①地割れ＝断層面（保存館）、②再現された地震直後の台所（メモリアルハウス）、③阪神高速高架橋倒壊現場のモニュメント（保存館エントランス）、の3箇所である。これらは、いずれも、動かしがたい知覚的現前として人々の前に迫ってくる存在である。特に、①と②は、「実物」が、本来の「場所」に、「当時」のままの状態で存在するという点が重要だろう。さらに、阪神・淡路大震災という大きな出来事について、それぞれが、①その原因、②身近な結果、③制度化された結果、を象徴する物理的存在として機能していると考えることも可能であろう。

(2) 時空限定的な発話：

多くの来館者（少なくとも5割を越える）が、出来事の時間と場所を具体的に限定する種類の発話を行う。例えば、（メモリアルハウスの台所の時計を指しながら）「ほれほれ、5時46分で、時計止まってるわ」、「そう、そう、あの時間や、あの時間に起こってんなあ」。あるいは、（住居の横の地割れを指しながら）「ここ、ここが、ズレたんや」。以上のような発話、会話である。Ⅳ節で後述するように、同施設の機能の少なくとも一部とし

て、地震、活断層、あるいは、災害・防災一般に関する「自然科学的知識」を教示・伝達することが想定され、展示内容の多くもその点を志向している。しかし、断層面やメモリアルハウスといった具体的物在の迫力は、こうした時空普遍的な知識とは対極にある時空限定的な意識・発話を、多くの場合喚起するようである。

(3)　「活断層」という用語：

来館者は、施設をめぐり歩く間、ほとんど「活断層」という言葉を発しない。来館者は、「活断層」の代替語として、「ズレ」を使う。これとは対照的に、録音された解説放送、スタッフがハンドマイクによって行う案内放送、展示パネルには、「活断層」という用語が満ちあふれている。また、語り部らは、これら両方の用語を使用する。こうした格差は、専門家と一般の人々との間に見られる知識や言語慣習といった単純な事実に起因するものではなく、前項でも指摘した抽象性(「活断層」という時空普遍的存在)と具象性（この目の前の大地の「ズレ」という時空限定的存在）との対照性に基づくものと見なければならない。

(4)　展示と案内放送：

館内スタッフがハンドマイク片手に行う案内放送が、展示パネルに示された時空普遍的に妥当する解説情報と、眼前の具体的光景とを結びつける役割を果たしている。例えば、「このように地面が持ち上がったまま右にずれてしまったために、畑の畦も食い違っています。生活道路も引きずられてアスファルトも破壊されました。このように地面が持ち上がったまま右にずれる断層を、右横ずれ逆断層と言います。館内は、低い方が元の地面となっております」。すなわち、前項(3)で指摘した方向性を異にする2つのタイプの認識を宥和させる働きを、これらの案内放送が担っている。

(5)　来館者自身の被害への言及：

来館者は、例えば、館内施設・展示物を眺め、時には、具体的に指で指示しながら、自らの直接的、ないし、間接的な被災体験を語りあうことが

多い。例えば、メモリアルハウス内の台所で、「わたしの妹は、伊丹なんやけど、こんなもんやなかったよ。この家、言うても立派やん、鉄筋やもん。うちんとこは、こんなもんちゃう」。あるいは、断層保存館内に展示された活断層分布図を指示しながら、「ほれ、ほれ、ここ、お宅、箕面やん」「ほんまや、ここや、ここに（断層が）あるんやもんなあ」。以上のような発話である。これらも、時空限定的な特箇的体験（自身の個別的体験）を他の個別的体験と比較対照させたり（前者の例）、あるいは、時空普遍的な知識と連動させたりする（後者の例）心的操作だと言えるだろう。

(6) 現地保存・当時保全へのこだわり：

地震直後の断層面の状態をそのままの形で、しかも、当時と同じ場所でそのまま保存していることへのこだわりが感じられる。例えば、断層面については、「屋根をつけただけで、当時の様子を現地保存しております」という案内放送が何度も繰り返され、同じ説明が施設の案内パンフレットにも登場する。また、メモリアルハウス内の台所については、（開館）直前まで実際に家人が生活していたこと、この家族の協力を得て、震災直後の台所の様子がそのままの形で再現されていることが強調される。空間と時間の特定が、時空限定的な認識を喚起している点については先述の通りである。

図11　来館者と話す館内スタッフ（「断層保存館」内）

(7)　地元フタッフとの会話：

地元の被災者がスタッフとして勤務している。ときに、彼らと来館者との間に会話が展開される（図11)。例えば、地面の揺れを再現する動く模型を前にして、以下のような会話を交わしていた女性のグループが存在した。「わあ、こないなんの」、「こわ」、「恐かったやろうな」、「家の下、こんなもん、まともにあったら」、「こない揺れるゆうことや」、「あ、うう、こわ」。そこに、一人の館内スタッフ（男性）が近づき、実際の地割れと模型を交互に指さしながら、「これがね、もとの地面ですわ。これがね、今動いたような状態でね、断層が動いたわけですわ。動き方をよく見とって下さいね」、「へえ、へえ」、「これが、今、こんな風に140m あるんですんわ」、(中略)、「これやったら、何揺れやらわからんわね」、「そう、わからんかった。私ら、もう、外へ逃げるので精一杯でね。どんな状態で逃げたか、いまだかつてわからない。床に転んでも、じっとしてそこに転んでおれないんですわ」。ここでも、男性スタッフの発話の焦点が、時空普遍的な解説情報から時空限定的な個別体験へと移行している点に注目しておこう。

(8)　「震災の語りべ」：

残念ながら、多くの来館者は、語りべのコーナーは一瞥しただけで通過するか、立ち止まったとしても長くはとどまらない。当初、メモリアルハウス内に設けられた「語りべの部屋」(別室になっていた）ではなく、メモリアルハウス内の順路の一角に語りべのコーナーが設けられたのも、このためである。一方、修学旅行生を対象とした活動は、先方の学校により事前に依頼を受けて実施される場合が多く、こうした場合は、「セミナーハウス」が会場として活用されている。また、最近は、現地での語り部に加え、小中学校を中心に、周辺市町村へ出向いての語り部活動も行われている（前出の注２を参照)。

(9) 語り部の内容：

語り部は、自宅の被災状況を撮影した写真などを傍らに置きながら、当時のことを、訥々と、あるいは、雄弁に語る。例えば、ある女性の語り部（図８）は、自宅を兼ねた店舗が損壊したことを当時の写真を示しながら語ってくれた。この女性は、神戸市に居住しているが、北淡町での語り部活動を耳にして参加を決めたとのことであった。また、別の男性（図９）は、被災後描くようになったという絵を傍らに被災体験を語った。とりわけ、地震発生前後の明石海峡付近の様子を描いた絵は、当時の不穏な空気を描いた迫力のあるものであった。こうした語り部の特徴として筆者が注目した点は、語りの内容がきわめて具体的な個別的体験についての語り（例えば、「そこの山手のところに家があったんです。町の方へ行こうとしたんですけど、ちょうど、このあたりまでは道路が凸凹で、とても歩けたもんじゃなかったですわ」）と、防災施策や災害対応に関する非常に一般的な提言・意見について述べる箇所（例えば、「やはり、アメリカのように、活断層法とか作っていかないといけないと思うんです」）とが、好対照をなすという点である。もちろん、この点も、前出の(3)項等で指摘した点と関連するが、重要なことは、こうした対照が被災者の発話形態としてはかなり普遍的である点である。例えば、長崎大水害（1982年）の被災者の発話にも同じ傾向が認められ（永田・矢守，1995)、先に触れた「グループ117」でも同様である（矢守，2001a など)。

(10) 観光地としての一面：

来館者が施設内に滞在する時間は、食事時間等を除けば、平均して30分程度である。また、多くの人々は、島内の他の観光地とともに、大型バス、または自家用車で本施設を訪問している。すなわち、主要施設の見学に多くの時間をあてるケースは、どちらかと言えば少数であって、多くの人々は見学もそこそこに物産館に立ち寄り地元の名産品や土産品を購入し、足早に同地を後にする。言いかえれば、本施設は、第一義的には、もちろん、

地元で亡くなった犠牲者を弔うための慰霊のための施設であり、かつまた、災害・防災について学ぶ博物館であるが、同時に一観光地としての性質も色濃く帯びている。

Ⅳ．考察――物質・風景と語りの交錯

(1)　「記憶／記録」対「身構え／純粋な風景」

かつて、柄谷(1980)が、モナリザの微笑に「内面」を読みとってはいけないと言ったことがある。微笑を、内面性の表現として、その内面をとらえようとしてはいけないというのである。モナリザには、概念としての顔ではなく「素顔」がはじめて現れた。だからこそ、その「素顔」は意味するものとして、内面的な何かを指示してやまないのである。内面がそこに表現されたのではなく、突然露出した「素顔」が内面を意味しはじめた。宮本(1997)は、このような意味での「素顔」の成立は、風景が表象（何らかの意味を担うもの）から解放され、「純粋な風景」が成立したことと同義だと論じている。

一方、映画「ショアー」について、高木(1996)は、あの映画は「身構え」の映画だと言う。過去のすべてを言葉によって想起できないという事実を受けとめた上で、それでも、それを今ここで想起しようとするとき――とりわけ、過去において占めていたのと同じ風景の中で想起を営むとき――、そこに、過去において想起する者がとっていた「身構え」が、過去の残滓、しかも貴重な残滓となって残る。想起を聞く者は、言葉ではなく、言葉から漏れ出た「身構え」を聞くのである。

さて、災害とは、まずもって、物質（風景）世界の崩壊ないし激変である。物質世界は、人々が言語的に構成する日常世界にあって、通常、もっとも安定した核をなしている。噛み砕いて言えば、眼前の風景とそれに割りふられた言葉は、極めて安定した関係を維持している――例えば、通常、

大地は、まさに「揺るぎない大地」である。したがって、その崩壊・激変は、中長期的には、安定した言語体系の中に再回収されるとはいえ、当事者たちは、当面、そのすべてを言葉によっては、すくいとれない状態に直面することになる（「何が何だかわからなかった」というのは、この状態を辛うじて言語化したものである)。この、風景と人間（物と心）が渾然一体となった混乱状態、言い換えれば、Sugiman (1997)の言う集合性の4項関係態の動揺を、語り(能知)の側から見たさまを、高木は、「身構え」と言っているのであり、風景(所知)の側から見たさまを、柄谷、宮本は、それぞれ、「素顔」、「純粋な風景」と呼んでいる。

以上を踏まえて、筆者が、阪神・淡路大震災を中心とする災害体験の記憶と伝達に関する一連の研究を通して案出したフレーム・ワークを、図12に示した。図12の意味は、以下の通りである。まず、あらゆる現実的な体験（出来事）は、時空限定的・特箇的な事象として生じる。つまり、かけがえのない一回限り、その場限りの事象として生じる。しかし、それらの出来事は、通常は、それが「意味」によって同定されている限り、すでに、一定の普遍性・一般性を宿した存在として生じている。言いかえれば、出来事の「かけがえのなさ」を部分的に喪失している。

この意味での普遍性・一般性が、主体－客体の2項図式における客体側で物象化したものを、筆者は「記録」と呼んできた（矢守，2001b; 2001c)。

	時空限定的・特箇的	時空普遍的・一般的
主体側	「身構え」	感情・認知＝「記憶」
	…… 未分化 ……	―― 分 化 ――
客体側	「純粋な風景」	コト・モノ＝「記録」

図12　考察のためのフレームワーク

「記録」とは、日常語に言う記録（記録集や記念碑の類）を含む広義のそれであり、その出来事について主体による認識の対象として現れるもの一般を指す。よって、例えば、6400人余りが亡くなったコトも、高架橋が倒壊したコトも、倒壊した高架橋というモノそれ自体も、すべて、広義の「記録」である。

他方、それが主体側で物象化したものを、筆者は「記憶」と呼んできた。「記憶」も、日常語に言う記憶を含む広義のそれであり、その出来事について主体の側に帰属された相で現れるもの一般を指す。よって、例えば、「とても寒かったことを覚えている」といった狭義の記憶は、もちろん「記憶」であるが、「記憶」は他にもある。例えば、「今後、都市防災機能の向上が重要」といった認識・態度や、「何も思いだしたくない」、「何も覚えていない」といった感覚も、そうした主体帰属的な態度・感覚が時空普遍的な意味を帯びて表明されている限りで（例えば、「何も覚えていない」という文の意味は、だれにでも分かるのだから）、これらも、「記憶」の一種である。以上が、図12の右サイドの説明である。

先に述べたように、突発的で、かつ激甚な自然災害という体験（出来事）の特徴は、上記の普遍化・一般化が阻害されがちな点にある。換言すれば、相対的に、出来事の「かけがえのなさ」が残留する傾向が強いのである。ここで誤解してはならないことは、「かけがえのなさ」とは、その出来事の体験者が、強烈な（言いかえれば、クリアーな）「記憶」を有することではないという点である。そうではなく、既存の意味体系に違背するような、あるいは、体系そのものを破壊するような強烈な出来事は、「記憶」と「記録」の双方の生成（つまり、出来事の普遍化・一般化）を拒む形式で生じるのである。なぜなら、普遍化・一般化を可能たらしめているのが、当の出来事によって動揺を余儀なくされている、他ならぬ、その意味体系だからである。この点に関しては、戦場体験を分析した冨山（1995; p.104）が肯綮に中たった剴切な考えを披露している。「動かしがたい個的な体験

[「記憶」；引用者] を語っているのではなく、語れば語るほど個的な領域が解体してしまう不安な発話こそ、戦争体験の語りなのである」。

では、こうした普遍化・一般化に至る以前の出来事は、どのような原初的様相を呈しているのだろうか。それを表したのが、図12の左サイドである。もっとも肝要なことは、こうした境位にあっては、主体側と客体側の分離そのものが脆弱だという点である。例えば、先述の通り、大地が揺らぐ地震という出来事は、通常、もっとも安定した客体を文字通り動揺させ、ひいては、主客分化をも揺るがせる。要するに、この種の出来事は、主体（私）が客体（地震）に対峙しているという実感（構図）そのものを根こそぎ奪い取るのである。これは、何も特別な体験ではない。だれしも、強烈な出来事の渦中にあるときには、明確な感情（「記憶」）が生じるのではなく、「放心状態」、「真っ白」といった形容がフィットするような様相を生きることを（回顧的に）知っているだろう（矢守，2000b; 2001e）。これは、Bowlby（1980）の言う「無感覚の段階」や、やまだ他（1999）の言う「実感なしの段階」にも照応する。再唱になるが、図12の「身構え」、「純粋な風景」とは、こうした、本来、主客未分化な事態を、あえて、両契機の分割を前提に概念化したものである。つまり、この主客混融事態を、主体側から見たさまを「身構え」（高木，1996）と、客体側から見たさまを「純粋な風景」（宮本，1997）と、それぞれ呼んだのである。

(2) 「震災記念公園」（博物館）が果たす機能

前出(1)項で提示した枠組みに依拠するならば、「震災記念公園」、ひいては、この種の博物館一般は、２つの主要な機能を果たしていると考えられる。

まず、その物質的基盤（展示・公開された物質と現地の風景）がもたらす知覚的現前の圧倒的迫力を前提とした「記録」の提示、および、「記録」に「記憶」を連合させた「記憶／記録」の確立である。体験の記憶と伝達

に有用と思われる他の手段・方法（Ⅰ節）と比較したとき、博物館という手段の特徴は、当の体験がそれらを環境的世界として展開された物質的環境の再現・提示をその主幹としている点に求められるだろう。実際、「震災記念公園」もまた、そうした特徴を色濃く有していることをこれまで見てきた。これらの特徴は、一定の「記憶／記録」の世界を、広範な人々に長期にわたって安定的かつ効率的に伝達する機能を担保していると言える。

もっとも、この特徴は、他面では、以下に述べる問題点をもはらんでいる。すなわち、「記憶／記録」の（性急な）確立は、物質的環境（「記録」）と人々の内面（「記憶」）との間に制度的かつ固定的な結びつきを規定することにもつながる。こうした「記憶／記録」の制度的確立は、体験が言語によって指示・表示を受ける限りにおいて、あらゆる営みに付随するものではある。しかし、博物館においては、それが物質的基盤に根ざしている点で、特にそうした傾向が顕著となることは言うまでもないだろう。だとすれば、こうした機能は、当該の体験を直接経験した当事者たちがその渦中にあった「身構え／純粋な風景」へのアプローチを閉ざすことにもなりかねない。

しかし、「震災記念公園」は、もう一つ別の機能をも果たしているように思われる。それは、他ならぬ「身構え／純粋な風景」への回帰を促進する働きである。筆者の観察では、「震災の語りべ」、あるいは、館内スタッフとして活動する地元の被災者と来館者との間の相互作用が、こうした機能を担っていると思われる。すなわち、語り部らが、自らの特箇的体験を具体的な言葉で語りはじめたこと、正確に記せば、その語りからはどうしてもあふれ出てしまう「身構え」を来館者の前にさらしはじめたこと、そして、来館者の多くが、現場にあって時空限定的な語りを余儀なくされていること――これらの事実は、「身構え／純粋な風景」への接近が展開されていることの証左となろう。

博物館が有するこのような２つの機能については、今井（2000）や荻野

（2000）にも関連した論考がある。今井（2000）は、本稿で検討対象とした「震災記念公園」について分析するなかで、観光人類学の知見に依拠して、「大文字の真正性」と「再現の真正性」とを対照させている。すなわち、活断層をめぐる異論を挟む余地のない教科書的な記述が、出来事や体験に関する「大文字の真正性」を保証し、他方、当時のままの住居や語り部活動は、被災状況に関して「再現の真正性」を担保しているというのである。この整理を本稿の枠組みに即して読み換えるならば、「大文字の真正性」と称されているものは、ほぼ「記憶／記録」の世界に対応するであろう。一方で、「再現の真正性」の位置づけは微妙である。つまり、ここで言う「再現」が当時の原初的な世界の再生を期したものである限りにおいて、それは、「身構え／純粋の風景」に志向した概念だと言える。もっとも、今井自身も示唆しているように（今井，2000，p.8）、「ほかでもないこれこそが本当の『真実』なんだ」という形式をとって、「再現の真正性」それ自体が別の「大文字の真正性」へと転化する可能性をも秘めている。

一方、荻野（2000）は、「類型化」と「固有名」とを対照させている。具体的には、断層保存館も例外ではないように、博物館における展示や解説文は、ある種の一般化を避けることは出来ない。それが、特定のイデオロギー、政治的立場を標榜するか否かといった議論はおくとしても、展示内容が言語や物質といった媒体を介している限りにおいて、原初の体験の「類型化」は不可避なのである。すなわち、「大文字の真正性」と同様、荻野の言う「類型化」も、大筋で、「記憶／記録」が有する特質と対応していると見ることができる。

他方、博物館は、こうした「類型化」に抗する機能も発揮しうる。例えば、広島の平和記念資料館に見られる固有名入りの解説文や、各地の慰霊碑に刻まれた固有名は、「類型化」がもたらす体験の匿名性に真っ向から抵抗し、（例えば、身内や知人の）具体的で固有の体験に超越的な価値を付与しようとする意志が込められている。その意味では、ここで言う「固

有名」と「身構え／純粋の風景」とは同じベクトルを有している。ただし、「固有名」が、当該の個人がその内面に所蔵する「記録」の絶対性のみを顕揚し、当の「記憶」がそこから生成されるところの「身構え／純粋の風景」の世界への想像力を欠く場合にはその限りではない。

さて、先に紹介したように、筆者は自身、「グループ117」という語り部グループを共同主宰している。ある日、小学生を対象とした活動の最中、次のような出来事があった。語り部らがそれぞれの被災体験を語りながら神戸市内の被災地跡を小学生と一緒にめぐり歩いた後、一行は、最後に「阪神大震災慰霊と復興のモニュメント」(神戸市中央区)を訪れた。このモニュメントの地下部には、神戸市内で亡くなった犠牲者約4500人の氏名が記されている。それを女性の語り部の一人が指さした。指示した先は、女性の娘の氏名であり、その日、その女性は、被災してからわが娘を亡くすまでの経緯を子どもたちにずっと語ってきたのであった。

その瞬間の子どもたちの反応は、実に注目すべきものであった。一瞬、ざわめきが止まり、皆の視線が一斉に女性の顔とモニュメント上の氏名との間を揺れ動いたのである。銘板に記された犠牲者のリストは、リスト全体としてみれば、まさに「被災者」という「類型」を可視化する。しかし他方で、その中に記された個々の氏名は「固有名」に他ならない。実際、この女性は、その日、阪神・淡路大震災という「類型化」された出来事、あるいは、震災犠牲者という「類型化」された人間についてではなく、一人の具体的な人間（女性の娘）についてずっと語ってきたのであった。つまり、このとき、子どもたちは、「類型」の中に一つの「固有名」が浮上する瞬間に立ち会っているのであり、逆の見方をすれば、この女性の切々たる語り、ひいては、その語りの基盤となる彼女に固有の体験が「類型化」を被った瞬間を垣間見ているのである。そのことがもたらす衝撃が、子どもたちをしてかかる身体反応を惹起せしめたのである。

荻野が指摘するように、本稿で検討してきた震災記念公園を含め、多く

の博物館において、「類型化」と「固有名」という２つの用語で象徴される２つの矛盾するコンセプトに基づく事業・展示が展開されている。それは、事実である。しかし、矛盾自体が問題なのではない。体験伝達には方向性を異にする２つの方法が存在し、双方がそれぞれ固有の有効性（と同時に問題点）をもっている。だから、問題は、これら２つのベクトルをいかに補完的に統合するかである。上で述べた「指差し」は、この課題に対する一つの回答を示唆しているように思う。

注

1）なお、阪神・淡路大震災に関連したものとしては最大規模の施設（博物館）である「阪神・淡路大震災メモリアルセンター」（仮称）が、まもなく、神戸市にオープンする（2002年４月開館予定）。同センターについては、震災体験の継承を図る役割とともに、災害研究の拠点、防災関連機関のネットワーク結節点としても期待が高まる一方で、その運営形態、機能については、厳しい問題提起も存在する。同センターについては、別の機会に詳しく論じたい。

2）先述の通り、筆者は、1999年以降、「グループ117」という語り部グループ（神戸市中央区）に自身籍を置き、実践的活動と研究に従事している。この点からも、別の被災地北淡町における語り部活動（「震災の語りべ」）にも大きな関心を寄せている。目下、相互の情報交換、活動交流についても検討中である。よって、本件については、本論文では最低限の記述にとどめ、今後の活動交流を踏まえた上で別の機会に詳しく論ることにしたい。

引用文献

Bowlby, J. 1980 Attachment and loss (Vol.3), Loss: Sadness and depression. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳） 1981 母子関係の理論Ⅲ：対象喪失 岩崎学術出版社

Gergen, K. 1985 The social constructionist movement in modern psychology. American Psychologist, 40(3), 266-275.

今井信雄 2000 災害と観光のはざま――消費社会のなかの阪神・淡路大震災―― 日本社会学会第73回大会一般研究報告Ⅱ発表資料

柄谷行人 1980 日本近代文学の起源 講談社

桂 雄三 1999 断層を文化財として保存する 月刊文化財（No. 433） 文化庁

宮本佳明　1997　もうひとつの廃墟論　笠原芳光・季村敏夫（編）「生者と死者のほとり――阪神大震災・記憶のための試み――」　人文書院　p.224-258.

Moscovici, S.　1984　The phenomenon of social representations. (In.) R. Farr & S. Moscovici (eds.), Social representations. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

永田素彦・矢守克也　1995　災害イメージの間主観的基盤――昭和57年長崎大水害についての会話分析――　実験社会心理学研究, 36, 197-218.

荻野昌弘　2000　負の歴史的遺産の保存――戦争・核・公害の記憶　片桐新自（編）「歴史的環境の社会学」　新曜社　p.199-221.

Sugiman, T. 1997　A new theoretical perspective of group dynamics. (In.) K. Leung, U. Kim, S. Yamaguchi, & Y. Kashima (eds.), Progress in Asian Social Psychology (vol.1). Singapore: Wiley, p.37-53.

高木光太郎　1996　身構えの回復　佐々木正人（編）「想起のフィールド」　新曜社　第7章

冨山一郎　1995　戦場の記憶　日本経済評論社

やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤田志穂・堀川学　1999　人は身近な「死者」から何を学ぶか――阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより――　教育方法の探究, 2, 61-78.

矢守克也　1995　事故・災害の「風化」に関する研究――阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、日航ジャンボ機墜落事故・光化学スモッグ――　日本グループ・ダイナミックス学会第44回大会発表論文集, 2-5.

矢守克也　2000a　記憶と記念の社会心理学Ⅳ――モノ語りと修学旅行――　日本グループ・ダイナミックス学会第49回大会発表論文集, 88-91

矢守克也　2000b　記憶と記念の社会心理学Ⅰ――身近な死についての語り――　奈良大学紀要, 28, 159-168.

矢守克也　2001a　災害体験の記憶と伝達　やまだようこ・サトウタツヤ・南博文（編）「カタログ現場心理学」　金子書房　第14章

矢守克也　2001b　記憶と記念の社会心理学Ⅴ――「語り部ボランティア」を活用した震災教育プログラム――　日本心理学会第65回大会発表論文集,

矢守克也　2001c　記憶と記録の社会心理学Ⅵ――「モニュメント・ウォーク」の試み――　日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 831.

矢守克也　2001d　社会的表象理論と社会構成主義――W.Wagner の見解をめぐって――　実験社会心理学研究, 40, 95-114. 138-139.

矢守克也　2001e　〈戦争〉の記憶　奈良大学紀要, 29, 149-161.

矢守克也　印刷中 a　演劇による震災体験伝達の試み――「劇団青い森」の公演をめぐって――　奈良大学紀要, 30.

矢守克也　印刷中 b　社会的表象としての活断層――内容分析法による検討――　実験

社会心理学研究，**41**

矢守克也　投稿中　災害・事故の風化現象に関する基礎的研究

Yamori, K. 2001a How do people recall and communicate experiences of being damaged by a disaster? Presented at the 4th Annual Meeting of Asian Association of Social Psychology.

Yamori, K. 2001b How do people create historical representations of natural disaster? Presented at the 49th Annual Meeting of Japanese Group Dynamics Association.